

〈論文〉

姥皮の娘とタニシ息子の物語

——『ハウルの動く城』——

古川のり子

宮崎駿監督の劇場版アニメーション『ハウルの動く城』は、『千と千尋の神隠し』(2001年)に次いで、2004年11月に公開された。イギリス人作家ダイアナ・ウィン・ジョーンズの小説『魔法使いハウルと火の悪魔』¹⁾を原作とする、西欧風ファンタジーである。前作の『千と千尋の神隠し』は日本を舞台とするファンタジーだったが、そのパンフレットのなかで、宮崎駿氏は次のように述べている。²⁾

日本を舞台とするファンタジーを作る意味もまたそこにある。お伽話でも、逃げ口の多い西欧ものにしたくないのである。この映画はよくある異世界ものの一亜流と受け取られそうだが、むしろ、昔話に登場する「雀のお宿」や「鼠の御殿」の直系の子孫と考えたい。(中略)湯婆婆の棲む世界を、擬洋風にするのは、何処かで見たことがあり、夢だか現実だか定かでないためだが、同時に、日本の伝統的意匠が多様なイメージの宝庫だからでもある。民俗的空間——物語、伝承、行事、意匠、神ごとから呪術に至るまで——が、どれほど豊かでユニークであるかは、ただ知られていないだけなのである。

現代の子供たちはハイテクにかこまれ、うすっぺらな工業製品の中で根を失っている。彼らに対して、日本の「私達がどれほど豊かな伝統を持っているか、伝えなければならない」と宮崎氏は言う。

ところが宮崎氏はその次に作ったのは、西欧を舞台とするまさに「西欧もの」のファンタジーだった。前作の意図に反して、ここには日本の伝統的なものは何も見あたらない。しかしそれにもかかわらず宮崎版『ハウルの動く城』は、やはり日本の昔話の「直系の子孫」であり、伝統的な物語との繋が

りを失ってはいない。宮崎氏はこの作品において、洋風の外見をまといながらも私たちの心の基盤に深く根を下ろした、新たな「日本の昔話」を生み出そうとしている。

1. 娘の物語

— ソフィーと姥皮の娘 —

(1) ソフィーの物語

『ハウルの動く城』は、主人公ソフィーの視点で語られる。18歳の彼女は真面目なしっかり者だが、かたくなで自分に自信を持っていない。父が遺したハッター帽子店を継ぎ、帽子を作って暮らす毎日である。

そんな彼女のもとにある日、魔法使いハウルが現れた。彼は動く城を操り、美女の心臓を食べると噂されている。しかし彼は兵士に絡まれたソフィーを救い、彼女の手を取って空中を散歩して妹の働く店まで送り届けてくれた。その夜、ソフィーの帽子店に、ハウルの心臓を奪おうとつけねらう荒れ地の魔女がやって来た。魔女は呪いをかけて、ソフィーを90歳の老女の姿に変えてしまう。

老女ソフィーは、家を出て荒れ地へ向かう。ソフィーはカカシの助けを得て、荒れ地に行くハウルの城に入り込んだ。さびた金属やガラクタの寄せ集めからなるこの城は、暖炉の中の火の悪魔カルシファーを原動力として、生き物のように動いている。カルシファーは、自分を暖炉に縛り付けている、ハウルとの契約の秘密を見破ってくれという。

ソフィーは掃除婦としてこの城に居座り、ハウルやその弟子のマルクルとともに生活することになる。早速、彼女は城の大掃除を始めた。一方ハウルは密かに怪鳥に変身して戦争の現場に出かけ、地上の町を爆撃する飛行軍艦に魔法攻撃をくわえていた。カルシファーは、ハウルが人間に戻れなくなることを心配している。

次の日、ソフィーの掃除のせいで変化した呪いによって、ハウルの美しい金髪が黒く変色する事件が起こる。ハウルは絶望して、身体から緑色のゼリー状のネバネバした液体を溢れ出させる。ソフィーがハウルの部屋に彼を寝かせミルクを届けて看病すると、彼は自分が臆病者であり、荒れ地の魔女からも、国王による戦争への呼び出しからも逃げているのだと告白した。結

局、ソフィーがハウルの母のふりをして、国王と魔法の先生マダムサリマンのもとへ、彼が戦争に参加しないことを伝えるに行くことになる。

ソフィーが王宮に向かうと、荒れ地の魔女も国王の招請に応じて王宮に現れた。王室付き魔法使いサリマンはハウルのことを、素晴らしい魔法の力をもちながら、悪魔に奪われて心をなくした危険な人物だという。やはり悪魔に身も心も食い尽くされた荒れ地の魔女は、サリマンによって魔力を奪われ本来の年齢の老女にされてしまった。ハウルからも同じように力を奪うと脅すサリマンに対し、ハウルは自由に生きていだけで魔王にはならないと、ソフィーは断言する。

そこへハウルが現れてサリマンと対決し、その魔法攻撃を受けながら、ソフィーと、荒れ地の魔女とサリマンの犬ヒンを連れて脱出した。夜明け近く、激しく戦って疲れ傷ついたハウルが黒い怪鳥の姿で帰って来た。洞穴の奥で呻く怪鳥ハウルに、ソフィーはあなたの呪いを解きたい、愛していると告げるが、彼はもう遅いという。

翌日、ハウルは引越しを行い、城をソフィーの帽子店と結びつけた。城の扉はハウルが幼い頃に過ごした、花咲く湿原にも通じている。新しくなった城でソフィーとハウル、マルクル、荒れ地の魔女、ヒンとの共同生活が始まった。しかし戦火は激しくなり、帽子店のある町は爆撃にさらされ、サリマンの手下も襲いかかってくる。ソフィーをめがけて爆弾が落ちてきたとき、怪鳥と化したハウルが危機から救った。ハウルは、ソフィーを守るために戦場へと赴く。

ソフィーはハウルが戦わなくてすむように、戦火の町からの引越しを決意する。まず彼女は城の原動力であるカルシファーを外に出して、いったん城を崩壊させた。そして自分の髪を燃料として与えたカルシファーを再び暖炉に置くと、城は小さなソフィーの城となって立ち上がり、荒れ地を走り出した。ところが荒れ地の魔女が、カルシファーの炎の内にあるハウルの心臓を見つけ、暖炉から取り出して握りしめた。火だるまになった魔女にソフィーが水をかけると、魔女の手の中でハウルの心臓を包む青い火が弱々しく燃えている。そのとき城がふたつに割れ、ソフィーとヒンを乗せた半分は暗い谷間へ落ちていった。

ハウルの心臓と合体したカルシファーに水をかけたことで、ハウルが死んだらどうしようと、ソフィーは号泣する。するとハウルからもらった指輪が

光り、落ちた城の扉を指し示す。ソフィーが扉の向こうの暗闇の奥に踏み込んでいくと、そこは子供時代のハウルがいる湿原だった。空からたくさんの流れ星の子が降り注ぎ、落ちては死んでいく。その中に立つ少年ハウルは、落ちてきた星の子を手を受けとめ、それを呑み込んで、胸から彼の心臓と合体した火の悪魔カルシファーを取り出した。それを見たソフィーは、彼女を見つめる彼らに向かって「私はソフィー、待ってて、私、きっといくから」「未来で待ってて」と叫ぶ。

ソフィーがもとの空間に帰ると、そこには傷ついた怪鳥ハウルがうずくまっていた。彼女は待たせたことを詫びながら、彼に優しくキスをする。人間の姿にもどって気を失ったハウルの胸に、ソフィーはカルシファーと心臓を押し込んだ。するとカルシファーは心臓から離れ、星の子となって空に飛び出し、わずかに残っていた城の残骸も同時に崩れ落ちる。ハウルが目覚めると、ソフィーは彼に抱きついた。城から自由になったカルシファーは、彼らのもとに戻ってくる。再びもと通りの形態になった城は、若い姿のソフィーとハウル、老いた魔女、マルクル、ヒンを乗せて、雲の峰の上を飛んでいった。

(2) 昔話・姥皮

主人公ソフィーの特徴は、老女への変身にあるが、老女の姿になって働く少女の物語は、古くから日本の全国各地で広く伝承されてきた。昔話「姥皮」である。叶精二氏は、この話を「民話に造詣の深い宮崎が意識していた可能性はあるのではなかろうか」と指摘している。³⁾

昔話「姥皮」は、おおよそ次のような話である。

爺さが、ひでりつづきの日に山の田んぼへいって、「だれかこの田んぼに水をかけてくれるものがあれば、娘三人のどれか一人嫁にくれるがな」と一人ごとを言った。すると藪の中から一人の若者が出て来て、それなら、おれが水かけてくれるから目を閉じていると言う。細目を開けて見ると、でっかい大蛇が雨をよんで水をかけている。「娘を嫁にもらおう」と言われて爺さは家に帰り、寝床に入って困っていた。娘に大蛇の嫁に行ってくれと頼むと上の二人は断ったが、末の娘は「ああ、行ぐで、行ぐで」と承諾した。末の娘はふくべの中に針千本を入れて、迎え

にきた大蛇の若者と山へ行く。山奥で娘は池にふくべを投げ入れ、沈めてくれと言う。大蛇はそれを沈めようとしているうちに、針が体に刺さって死んでしまった。

娘はどこか遠いところへ行こうと山の中を下つてある家に来ると、口が耳まで裂けたおっかなげな婆さが芋を續んでいた。その婆さは山の大蛇に子供をみんな食われたひき蛙で、お礼にと行って娘に宝物のうばっ皮をくれた。これを着れば汚い婆さに見えるし、ほしいものを三度言えれば何でも出てくる。これを着て沢を下り大きい家に行つて、火たき婆さに使ってもらえという。

娘は言われた通り、大きな家の火たき婆さになった。ある晩、若旦那が火たき婆さの部屋を覗き、いとしげな娘が本を読んでいるのを見る。それがもとで若旦那は病気になって床についた。八卦見に見てもらうと、この家に若旦那の気に入った女の人がいるから、その人が持っていったお茶を飲めば治るといふ。みんながかわるがわる行つても、若旦那はちょっと顔を見てはうんうんうなっている。あとは火たき婆さだけになった。火たき婆さがうばっ皮を脱いで、いい着物を出して着て、紅つけて、おしろいつけて、お茶を持っていくと、若旦那はニコニコしてお茶を飲んだ。若旦那の病気はよくなって、娘はうばっ皮から嫁入り着物を出して、嫁になったといふ。(新潟県長岡市)⁴⁾

従順な娘は、父がした約束通り蛇髻のもとへ嫁に行くが、蛇髻が死んだ後もそのまま山中をさまよう。そこで出会った婆(山姥、ヒキガエル)から姥皮を与えられ、老女の姿になって長者の家の火焚き婆、風呂焚き婆などとなって働く。姥皮を脱いだ彼女の姿をのぞき見た長者の息子は恋の病を患うが、最後に娘はみずから姥皮を脱いで美しい女性となって現れ、息子を癒して幸せな結婚をする。

娘を覆う姥皮は、日本各地の伝承によつては「頭巾、綿帽子、蓑、着物」などと語られることもある。これらは、結婚の儀礼で花嫁の頭を覆う被り物としても古くから用いられてきたものである。今日の結婚式でも花嫁は、「角隠し、綿帽子、^{かつぎ}被衣」などの独特な被り物を身につける。こうした被り物で頭や体を覆うのは、花嫁ばかりではない。たとえば葬式において死者は、「蓑笠」を被り、「三角の白い額紙、白布」などで頭や顔を覆う。また赤子の誕

生の儀礼では、胞衣（子宮内で胎児を包む膜や胎盤）が「蓑笠」と呼ばれ、被り物の役割を担っていることが知られている。

つまり結婚、葬送、誕生という人生の最も重要な通過儀礼において、娘の世界から妻の世界へ、この世からあの世へ、あの世からこの世へと移動するとき、儀礼の主役たち（花嫁、死者、赤子）は共通して「特別な帽子」を被るのだ。小松和彦氏が指摘しているように、通過儀礼における被り物は、彼らが通過儀礼の真ただ中にあり、日常を離れて、これまでの世界と新たな世界との間の境界領域を行く旅人であることを表している。⁵⁾ 昔話・姥皮では、姥皮を被った試練のときを経て、娘は晴れて長者の息子の嫁になる。姥皮の娘の被り物は、婚礼における花嫁の被り物と共通する性質をもつ。

通過儀礼の主役たちの被り物はまた、彼らを覆う母胎（子宮）としての意味を帯びている。胞衣に包まれた赤子の旅と同様に、嫁入り行列・野辺送りの道中は花嫁や死者がいったん死んで母の胎内にもどり新しい世界に再び生まれ出るための、死と再生（母胎回帰）の旅でもある。昔話・姥皮の娘が被る「姥皮」は、まさに「母の皮」であり、娘がその中で変容するための母胎としての役割を果たす。

昔話の中で娘にこの姥皮を与えるのは山姥だが、その正体はヒキガエルだと語られることが多い。カエルはオタマジャクシから変身し、冬には地中に入って眠り春に再び生まれ出るので、変身・再生する生き物と見なされてきた。このような変身と再生の力をもった姥皮＝母胎に包まれて、娘は変容しつつ再生のときを待つ。つらい死の試練を経てやがてその皮を脱ぎ捨てたとき、彼女は美しい大人の女性に生まれ変わり、病んだ長者の息子を救って幸せな結婚を手に入れることになる。⁶⁾

(3) 姥皮の娘とソフィー

「老女ソフィー」は、このような「姥皮を被った娘」の姿と重なり合う。それはまたソフィーが、被り物を扱う「帽子店の娘」であることとも無関係ではない。ソフィーは出かけるとき、常に質素な帽子を身につける。宮崎駿氏が描いたイメージボードには、目深に帽子を被ったソフィーの絵の横に「おしゃれというよりヘルメット」「防御」と書き込まれている。⁷⁾ 物語の始まりにおいて姥皮の娘は、どんなに理不尽でも父の言いつけに従うだけの従順な娘だったが、ソフィーもまた父の仕事を継ぎ、固く身を守って自分で人

生を切り開こうとしない娘だった。そのような少女たちを覆う被り物（老女の外見・帽子）は、彼女たちを一人旅の危険から優しく守る一方で、日常の世界から切り離し、死の試練に追い込んで変容を促す役割を果たす。姥皮の娘を老女の姿にしたのはヒキガエルの婆だが、映画ではこの役目を荒れ地の魔女が担っている。ヒキガエル婆も魔女も、少女を試練へと導く。



図1 おしゃれというよりヘルメット

ところで姥皮の娘の場合、自分で姥皮を着脱して外見を変化させ、夜一人にいるときは若い娘の姿にもどっていることができた。ソフィーも彼女の気持ちの変化に応じて、若返ったり年を取ったり、その外見を変化させる。ソフィーの場合は自分で意識していないが、もしも彼女が老女の皮を脱ぎたいと本心から願ったならば、本当は姥皮の娘のように自分で皮を脱ぐことができるのだと思われる。自分で呪いを解く時が来るまで、ソフィーは無意識的な老化と若返りを繰り返しつつ試練の時を過ごす。

姥皮の娘が長者の家の風呂や釜の火焚き婆として働いたように、ソフィーはハウルの城の掃除婦、風呂焚き・飯炊き婆として働く。城の大掃除をして掃除婦の仕事を十分に果たすと、ソフィーは魔術師サリマンと対決することになる。サリマンは、荒れ地の魔女と一対を成す存在である。永遠の若さを求める荒れ地の魔女が生・性への欲を肥大化させた人物であるのに対して、サリマンは国家のために支配欲を肥大化させた魔女であるといえる。サリマンとの対決において、ソフィーははじめて積極的に自分の意志で行動し、魔女の申し出を断ってハウルを守ろうとする。そして「ハウルはきません。魔王にもなりません。悪魔とのことはきつと自分でなんとかします。私はそう信じます!!」と断言し、ハウルへの信頼を明らかにした。このとき彼女の外見は若返っている。ところがサリマンに「ハウルに恋してるのね」と、彼への恋心を指摘されたら、老女の姿にもどって自分の本心をその下に覆い

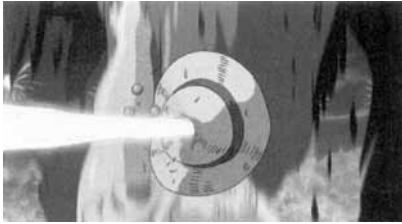


図2 突き破られた帽子

隠してしまう。頑なな彼女は、なかなか自ら表皮を脱ごうとはしないのだ。しかしその代わり、最後にハウルと王宮から脱出するとき、彼をかばったソフィーの「帽子」をサリマンの魔法の杖が貫いている。物語の始めからソフィーが被ってきた帽子

は、ここではじめて突き破られ脱ぎ捨てられた。

ところがこの直後、ハウルは城を引っ越しさせ、その内部をソフィーの帽子店と結びつけた。新たな「城＝帽子店」は、失われた帽子の役割を引き継ぐかのようにその内部にソフィーを包み込む。ハウルは彼女と住む「城＝帽子店」を守ろうとするが、ソフィーは二人のために自ら城を破壊しようと決意する。彼女はカルシファーを城から出して、いったんハウルの城を崩壊させる。そして自分の長い三つ編みの髪を与えたうえで、カルシファーをもう一度暖炉に据えると、瓦礫の中から小さな「ソフィーの動く城」(絵コンテ 1198)⁸⁾ が誕生した。宮崎駿氏は、髪が短くなったソフィーの絵に「ヒロインようやく登場！」(同 1185)⁹⁾ と書き込んでいる。ソフィーはここでついに脱皮し再生を遂げたのだ。ここまで彼女は何度も老化と若返りを繰り返してきたが、これ以降再び老化することはない。ハウルの城の主導権も、ソ



ガラスの山
から
出てくる
ソフィーの動く
城

サリマンの杖

図3 ソフィーの動く城



ソフィーの髪
の短い髪
の髪、髪
かいて髪
ハロ・ヒュン
ヒロインの登場!!

図4 ヒロインようやく登場!!

フィーの手に委ねられた。

昔話において姥皮を脱いだ娘は、病の床についていた長者の息子を治して幸せな結婚を手に入れる。ソフィーも、心臓を失ったハウルの病を癒す力をここでようやく獲得したのだと思われる。しかし彼を救うためには、ソフィーがハウルの正体を知ってかつての約束を思い出し、「彼（ハウル）の物語」における自分の役割を理解していなくてはならない。

2. 息子の物語

—ハウルとタニシ息子—

(1) 昔話・タニシ息子

ハウルの動く城はさまざまなモノの寄せ集めから成るが、全体の大きさに不釣り合いな細い足でまるで生き物のように動き回る。佐々木隆氏はこの城について、人を驚かすと同時に身を守り隠すための城であるとして、硬い殻を被り角を出して身を守るサザエと対比している。またハウルが体から緑色のゼリー状のネバネバを出すことも、カエルやカタツムリ、ナメクジを思わせるという。そして「日本の昔話にタニシが娘によってりっぱな男性になるという話があります。宮崎駿はカタツムリやサザエと良く似たタニシの話を利用しているように思われます」と指摘している。¹⁰⁾

日本の各地に伝承されてきた昔話「タニシ息子」は、次のような話である。

昔、爺と婆が田の草取りに行くと、田つぶ（タニシ）がころころって転がってきて、爺様の膝の上に這い上り「息子にしてくれ」と言う。爺は子供がなかったので家に連れて帰った。次の日、田つぶは、嫁をもらいに行くから馬に鞍を置いてくれと言う。爺が「お前のようなつぶに嫁をくれる人があろうか」と言っても、つぶは馬の手綱につかまりころころ転がって行った。

どこだかの村の大きな家に行き、炉の木尻に上がって「嫁をください」と言うが「誰がお前のような者に嫁をやるか」と断られた。するとタニシは湯をまき散らし、さらに熱い灰をまき散らす。そこで家の人は仕方なく娘を嫁にくれた。田つぶは嫁を馬に乗せて、手綱につかまり転

がって馬を曳いて帰ってきた。爺婆はたいへん喜んだ。しかし嫁は田つぶを憎く思って、毎日にらんだ。そこで田つぶは「そんなに憎かったら石場に持って行って、びつちよとつぶせ」と言う。嫁は喜んで石場にタニシを持っていき、びつちよとつぶした。すると美しい良い男になった。そこで喜んで二人は結構に暮らしたという。(青森県三戸郡)¹¹⁾

タニシ息子を覆う硬い「殻」は、姥皮の娘を覆う柔らかな老女の「皮」に対応する。そのままでは結婚できない未熟な状態にある彼らは、妻や夫を獲得するための通過儀礼の途上にある。タニシ息子は、湯や灰をまき散らして脅したり、妻にする娘に盗みの罪を着せるなどして、ずる賢いやり方で娘をもらうことに成功するが、幸福な結婚をするためにはこれだけではまだ不十分である。ここにあげた青森の例では、タニシは石場で嫁につぶされて美しい男に再生を遂げた。真に妻を手に入れるためには、彼は相手の娘によって殺されなくてはならないのである。このことは各地方で、たとえば次のようにも語られている。

……娘は家を追われる。嫁にして連れ帰る。つぶが藁打ち石に上がってだれでもおれどころちつぶせ、というので、横槌で打つとつぶはつぶれ若者になる。二人は夫婦になる。(秋田県仙北郡)¹²⁾

……家に帰って嫁とともに神社に行く。嫁がつぶ太郎を下駄で踏みつぶすと、きれいな若者になる。一生幸せに暮らす。(新潟県長岡市)¹³⁾

……ある日タミナ(田螺)が「今日は磯遊びしよう。」と言うので、娘は短刀を懐に入れて、弁当持って行った。そして広い瀬で弁当開いた。するとタミナが、「お前はここに待ってれ、自分は三里先の沖まで泳いでくるから、自分の殻を大事に握っておれ。」と言うて、殻から抜けだして、沖の方へ泳いで行った。娘は今だと思って、タミナの殻を短刀で切り割って、そこから逃げ出した。前へ行くと、りっぱな侍が道ばたに待っておって、刀を抜いて「お前は俺の殻を割ったな。これからあらためて俺の嫁になるか、どうだ。」と言う。娘はこんなにりっぱな人なら、嫁になるどころではないと言うて、大喜びでうちに連れて行った。そう

して爺さんと三人、よい暮らしをした。(鹿児島県薩摩郡)¹⁴⁾

タニシ息子は娘によって槌や石などで叩きつぶされ、刀で割られ、あるいは足で踏みつぶされて死ぬ。そうして古い殻を脱ぎ捨てて生まれ変わり、大人の男へと脱皮を遂げる。打ち出の小槌を振ると立派な男になったと語る伝承もあるが、それは主人公の殺害を穏やかに表現したものだ。¹⁵⁾ タニシ息子が生まれ変わり、結婚できるようになるためには、自分を叩き殺してくれる娘が必要なのである。

(2) タニシ息子とハウル

ハウルは、ガラクタをツギハギした玩具のような動く城の中で、荒地の魔女や戦争への参加を要請する社会との関わりから逃げて、フラフラと移動し続けていた。宮崎駿氏によると、この城は「張りぼての城」「大砲をぶっ放したりもしない、見かけ倒しのガラクタ」¹⁶⁾で、ハウルは「大人になりきれない青年」¹⁷⁾なのだという。彼は見栄っ張りで自信家なのに、傷つきやすく臆病である。そんな彼を守る城を、切通理作氏は「引きこもりの牙城」と呼ぶ。¹⁸⁾

硬い金属に覆われた「城の中に籠もるハウル」の姿は、「殻に覆われたタニシ息子」の姿と良く似ている。それはまた「姥皮を被った娘＝ソフィー」の姿とも重なり合う。未熟な若者たちは、彼らを包む殻・皮の中で大人への脱皮に向けて準備しつつある。「タニシ息子＝ハウル」と「姥皮の娘＝ソフィー」は、たがいに助け合って成長していくが、その過程において、ソフィーは何度も老化と若返りを繰り返す、ハウルの城も解体と再生を繰り返す。『ハウルの動く城』の物語は、脱皮・脱殻による死と再生を繰り返しながら成長していく少女と少年の物語であるといえる。

ハウルはソフィーを仲介者とするので、それまで避け続けてきた魔女サリマンとはじめて対決する。激しい戦いの後、彼はみずから城を解体して新しい城を作り上げる。城は魔法によってソフィーの帽子店や、過去に自分がいた花咲く湿原に繋がる、美しく清潔な城に生まれ変わった。しかし新しくはなったものの、ハウルの城はこれまで通り暖炉の火の悪魔(カルシファー)によって彼の心臓に固く結びつけられたままである。彼は自分の殻＝城を、完全に脱ぎ捨てたわけではない。

ハウルが本当に生まれ変わり、彼を覆う「殻＝城」から自由になるためには、タニシ息子の場合と同様に自分を殺してくれる妻の登場を必要とする。ソフィーははじめからそのために彼に誘惑され、城に導かれていたようにもみえる。宮崎作品においては、昔話「姥皮」の主人公（ソフィー）と昔話「タニシ息子」の主人公（ハウル）が出会い、互いに関与し合って「新たな一つの物語」を形作っていく。

3. 姥皮の娘とタニシ息子の物語

—ソフィーとハウルの約束と再会—

(1) 蛇髻とタニシ息子

昔話では、姥皮の娘の物語とタニシ息子の物語は独立した別々の話で、それぞれの主人公が出会うことはない。しかし昔話においても、この二つの話の間には不思議な結びつきを認めることができる。

昔話「姥皮」の発端部分には、「蛇髻」と呼ばれる異類の婿が登場する。彼は沼や池の主である大蛇で、爺の願いに応じて田に水を入れ、約束通り娘を差し出すように要求した。蛇髻は「若い娘を求める恐ろしい異類」であり、娘によって退治される。ところが一方の昔話「タニシ息子」の発端部分では、この蛇髻と同じ振る舞いをタニシ息子本人が行うことがある。

或処に、前に千刈田、後ろに千刈田を持つ家があった。或年のこと、早魃つづきで田がズラリと乾せてしまった。主人は、この田を割れかしてしまえば米がとれないので、どうかして水をかけようとしたが、その工夫がつかなかった。そこで沼の縁に行って、「どのツブ（田螺）でもいいから今夜一晩のうちに田に水をかけてくれた者に俺の娘三人のうち一人くれてやる」と言った。次の日行ってみれば、昨夜一晩のうちに千刈田に水がかかっていた。その代わりにはツブへ娘をくれてやらなければならぬので……（岩手県水沢市）¹⁹⁾

多くの類話では、タニシ息子は神仏の申し子として、あるいは自らすすんで爺のもとに現れたと語られる。しかしその場合でも長者の屋敷を訪れた際のタニシ息子の求婚は、やはり強引で計略的である。

田螺は夜半に、こっそり娘達の寢所へ忍んで行って、懐からオシトギ餅どて出して、噛んだものを、ヨデコ（三番目娘）の唇に塗って来た。それから夜明けになったら、台所の方で何やら、『ツスツス』と啜り泣く音がするので長者殿が不審立てて行って見たら田螺が泣いている。事由を聞くと、爺から貰って来たオシトギ餅がないという。娘達が食ったに相違ないというので、長者殿も笑って、『どの娘でもお前のオシトギどて食った者があつたら、嫁に呉れてやる』と云った。（秋田県仙北郡）²⁰⁾

タニシ息子は眠っている娘の口元に米粉などを塗りつけ、自分の食べ物を盗んだと騒ぎ立てて無理やり自分の嫁にする。長者の娘にとってはタニシ息子もまた、強引に「女性を喰らう恐ろしい異類」なのだ。この性質は「タニシ息子」の多くの類話に共通して認められる。また各地の伝承には、蛇髯がタニシ息子と同じように、娘に槌で自分の肝をつぶさせたり（岩手県紫波郡）²¹⁾、首を切らせ（京都府竹野郡）²²⁾て死んで、立派な男性に生まれ変わったと語るものもある。このように姥皮の話の「蛇髯」と「タニシ息子」には、互いに置き換え得るような共通性がうかがわれるのである。

(2) 長者の息子の正体

昔話「姥皮」には、最終的に娘の夫となるもう一人の男性が登場する。「長者の息子」である。長者の家の人々がみな姥皮の娘を老女だと見なしていたなかで、彼だけが娘の本当の姿に気づき、彼女にしか癒せない恋の病に陥った。その理由とはとくに説明されてはいない。しかしそのような長者の息子の正体を、かつて娘に退治された「蛇髯」だと語る伝承がある。

長野県に伝わるこの話は、娘の父が蛇に対し、おまえの思うことを叶えてやるからと言って、呑み込みかけたカエルを放させたことから始まる。蛇は若い侍の姿で現れ、娘をくれという。困った父親は、娘が死んだようにして黒金の輿に入れる。蛇は娘を迎えに来ると、その輿に巻きついた。娘は熱くて死にそうだったが、やがて蛇は逃げて娘は助かった。蛇は池のなかで真っ赤になって死んでいた。このあと娘は旅に出て、白髪の婆から「おんべの皮」をもらう。婆は父に助けられたカエルだった。娘は大阪に出て、飯炊き

婆として奉公する。その旦那が夜、飯炊き婆の若い姿をのぞき見て寝込んでしまう。誰が薬を持っていっても受け取らないので、ついに婆が行くことになる。

そうしたら、旦那は薬とって飲んで、「うな、おらのかかになれ。」ていうんだと。わけいしょ（若い衆）はたまげて、「うな、おらのかかになれなんて、おら旦那はちっとしんきになった（気がふれた）ではないか。あんつら飯たきばあに、おれのかかになつてくれなんて。」そ思ったと。そうして「おらみたなもん。」なんていったでも、「どうでも、かかになつてくれ。」ていうさけ、おんべの皮ぬいで、わけいあねぎになつて、旦那のかかになつたと。そうして、一生仲よくくらしたと。そうしたら、その旦那がへっぴ（蛇）の生まれ代わりで、どうあつてもいっしょにならなければならなくて、いっしょになつたんだと。それつきり。（長野県下水内郡）²³⁾

姥皮の娘が最後に救った結婚相手は、じつは彼女がかつて結婚を約束した蛇髻の生まれ変わりだったという。娘の最初の婚約者である蛇髻は、約束を果たされることなく退治された。しかし彼は傷つき病んだまま「どうあつてもいっしょに」なろうと、成長を遂げた娘に再会し結婚の約束が果たされる日をずっと待っていたのだ。このような「蛇髻」は、先に述べたように「タニシ息子」ともきわめて近い性質をもっている。

昔話は、「蛇髻」と「長者の息子」と「タニシ息子」の繋がりをはつきり語っているわけではない。しかし昔話がこうして密かに示している可能性（三者が結びつく可能性）を、宮崎駿氏は「姥皮」と「タニシ息子」という二つの昔話を統合することによって実現してみせる。つまり「姥皮の娘（ソフィー）」の物語のなかに、「蛇髻＝長者の息子」の役として「タニシ息子（ハウル）」を入り込ませたのである。

(3) ハウルの病気と始まりの時の約束

物語の始めにおいて蛇髻が「女性を喰らう異類」であつたように、ハウルは「美女の心臓を喰らう怪物」として登場してくる。これは人々が彼について勝手に抱いたイメージだが、しかし実際にハウルは、魔法で敵の軍隊に襲

いかかり破壊する黒い怪鳥としての姿を持っている。魔法の力を振るって戦えば戦うほどハウルの体は怪鳥化し、やがて人間に戻れなくなって魔王と化すという。「怪物化」は、彼が強い魔法の力を獲得することによって得た病だといえる。長者の息子が患っていたのは恋の病だが、このようなハウルの病は、彼が幼い頃に火の悪魔カルシファーと契約をして自分の心臓を捧げたことに起因する心臓（心）の病なのである。そのときから、ハウルの心は成長を止めてしまった。



図5 サリマンと星の子とカゲ

ところで火の悪魔カルシファーは本来、流れ星の子である。星の子は、青白く輝く星のような顔と細い手足をもつ姿で描かれているが、この姿は魔女サリマンが魔法の力を振るったときにも現れる。つまり「火の悪魔＝星の子」は、「魔法の力」そのものでもあるのだ。その力に魅了された者は、サリマンのように強力な魔法や武器を用いて戦争を起こしたり、荒地地の魔女のように永遠の命を求めるようになる。サリマンが使う星の子の背後には、巨大な「マンダラケ人間」の黒い影が揺れている。これは「火＝星の子」の力がもつ暗い負の側面を表しているのだろう。ハウルの病は、彼を魔王へといざなう「火＝魔法」の病²⁴⁾でもあるのだ。

娘を喰らう怪物ハウルは、心臓を火に捧げて病んだ「蛇髻＝長者の息子」であり、結婚相手の娘によって殺される「蛇髻＝タニシ息子」でもある。他方のソフィーは、蛇髻と結婚の約束をしていながら裏切った「姥皮の娘」に相当する。「蛇髻＝長者の息子＝タニシ息子」であるハウルの癒しと再生は、試練を経て成長した「姥皮の娘」ソフィーが、「蛇髻」との最初の出会いと「結婚」の約束を思い出し、彼女自身の手で「タニシ息子」の妻の役割（＝夫の殺害）を果たすことによって成し遂げられる。

ソフィーはまず、火と合体したハウルの心臓を城から出すことによって、彼の「城＝殻」を破壊する。さらに彼女は、火に包み込まれたハウルの心臓

に水をかけた。これらはハウルを殺害する行為に等しい。そのことに気づいてソフィーが号泣したとき、彼女とハウルが最初に会った時の記憶、始まりの世界への道が開ける。

ここではじめてソフィーは、「火＝魔法」の病を患う異類であるハウルの正体と、かつて彼と交わした再会の約束を思い出し、彼のために自分がなすべき役割とその意味を理解する。病んだハウルは、幼い頃に「再会＝結婚」を約束した婚約者が、自分を殺して生まれ変わらせに来てくれるのをずっと待ち続けていたのである。すべてを思い出し理解したソフィーは、怪鳥の姿でうづくまるハウルに「ごめんね、私グズだから……、ハウルはずっと待っていてくれたのに」といいながら、優しくキスをする。そして弱々しく燃えるハウルの心臓を彼の胸に押し戻すと、火（カルシファー）は心臓から分離して、ハウルは再生を遂げた。「姥皮の娘」によって、「蛇髻＝病んだ長者の息子＝タニシ息子」は死に、立派な「夫」となって生まれ変わった。こうしてついに始まりの時の約束の通り、二人の真の再会＝結婚が果たされた。幸せそうな二人の背後に、主題歌「世界の約束」が流れる。²⁵⁾

4. おわりに

昔話「姥皮」の少女は、姥皮を脱いで再生し長者の息子と結婚をした。昔話「タニシ息子」の少年は、殻を脱いで生まれ変わり長者の娘と結婚して幸せに暮らしたという。映画でも、ソフィーを覆っていた姥皮（老女の外見・帽子）は破れ、消極的で頑なだった少女は、生きる力に溢れた女性へと変身した。ハウルの城も破壊され、彼の心臓はついに城から解放放たれて自由になった。虚栄心に満ちた臆病者の少年は、飾らない自立した青年となったように見える。自分の殻に閉じこもっていた少女と少年は、大人へと脱皮を遂げて互いに結婚相手を獲得した。

昔話では、物語はめでたしめでたしの結末に終わり、彼らが再び姥皮や殻を被ることはない。ところが『ハウルの動く城』の結末は、それとは少し異なっている。なぜなら物語の最後の場面で、「城」は再び復活して彼らに乗せて旅立ち、ソフィーの頭を新たな「帽子」が覆っているからだ。ソフィーとハウルを包むこの新しい被り物は、彼らが自分の意志で操るもので、かつてのようにその心を縛り付けるものではない。それでも彼らは、新しい城に

乗り、新しい帽子を被って再び旅に出る。彼らの物語は、まだ終わってはいないのである。

最後の場面で宮崎駿氏は、彼らの人生においてこのような脱皮・脱殻による死と再生の体験が、これからも何度も繰り返されていくことを表しているように思われる。『ハウルの動く城』のメインテーマ曲であるワルツ「人生のメリーゴーランド」（久石譲）のタイトルは、宮崎氏が自ら名づけたという。²⁶⁾ このタイトルが表す「繰り返し」は、前作『千と千尋の神隠し』のテーマ曲「いつも何度でも」につながっている。10歳の少女・千尋の冒険もまた、一度で終わるものではない。幼い頃、コハク川の主である龍神ハクと出会った千尋は、のちに10歳になったとき湯屋という異世界の体験の中でハクと再会し、それまで忘れていた彼の記憶を思い出した。冒険を終えてもこの世界に帰るとき、千尋とハクは再び会うことを約束している。

千尋「またどこかで会える？」

ハク「ウン、きっと」

千尋「きっとよ」

（千尋、手をつないだまま、石段をひとつ降りる。）

ハク「きっと、さあ行きな、振り向かないで」²⁷⁾

トンネルをぬけて現実世界にもどった千尋は、おそらく意識の上では異世界での冒険もハクのこともまた忘れてしまっただろう。次に彼らが出会ったとき、千尋がハクを思い出すことができるかどうかはこの作品には描かれていない。しかし18歳のソフィーとハウルの物語は、その後の千尋とハクの物語としても受け取ることができるのではないだろうか。新たな冒険の中で、「ソフィー＝千尋」は「ハウル＝ハク」と再会し、忘れていた彼の記憶を取りもどす。こうして人は人生において何度も死と再生の冒険を体験し、その度に大切なものと出会い、思い出し、別れ、忘却することを繰り返していくのだろう。

注

- 1) ダイアナ・ウィン・ジョーンズ『魔法使いハウルと火の悪魔』西村醇子訳 徳間書店 1997年。
- 2) 『千と千尋の神隠し』劇場版パンフレット 東宝株式会社 2001年 2頁。
- 3) 叶精二『宮崎駿全書』フィルムメーカー社 2006年 289頁。
- 4) 水沢謙一編『とんと一つあったてんがな』未来社 1958年 254-260頁 要約。
- 5) 小松和彦『異人論』筑摩書店(ちくま学芸文庫) 1995年 211-212頁。
- 6) 古川のり子「袋＝胞衣を被った子どもたち——誕生・結婚・葬送の民俗と神話・昔話——」『死生学年報』2009年 東洋英和女学院大学死生学研究所 129-146頁、「なぞとき神話と昔ばなし」(第10回鉢かづき姫・姥皮I、第11回鉢かづき姫・姥皮II、第12回一寸法師・タニシ息子)『歴史読本』新人物往来社 2012年4、5、6月号参照。
- 7) スタジオジブリ責任編集『THE ART OF HOUL'S MOVING CASTLE』徳間書店 2005年 43頁「おしゃれというよりヘルメット」「内気 防御 自尊心の口元」。
- 8) 宮崎駿『スタジオジブリ絵コンテ全集14 ハウルの動く城』徳間書店 2004年 537頁。
- 9) 宮崎駿、同書531頁。
- 10) 佐々木隆『「宮崎アニメ」秘められたメッセージ』KKベストセラーズ 2005年 20-23頁。
- 11) 能田多代子『手つきり姉さま』未来社 1958年 112-113頁 要約。
- 12) 関敬吾『日本昔話大成』3 角川書店 1978年 20頁。
- 13) 関敬吾、同書3、18頁。
- 14) 岩倉市郎『鹿児島県甕島昔話集』三省堂 1972年 68-70頁。
- 15) 古川のり子「なぞとき神話と昔ばなし 第12回一寸法師・タニシ息子 脱皮する少年たち」『歴史読本』新人物往来社 2012年6月号 266-271頁。
- 16) 『ロマンアルバム ハウルの動く城』徳間書店 2005年 119頁、美術監督吉田昇氏へのインタビューによる。
- 17) 同書、101頁、作画監督高坂希太郎氏へのインタビューによる。
- 18) 切通理作『宮崎駿の世界』筑摩書房(ちくま学芸文庫) 2008年 463頁。
- 19) 森口多里『黄金の馬』三弥井書店 1971年 72-73頁。
- 20) 『旅と伝説』1941年5号 52頁。
- 21) 関敬吾、前掲書3、21頁。
- 22) 関敬吾、前掲書2、53-54頁。
- 23) 浅川欽一『信濃の昔話』スタジオゆにーく 1974年 63-78頁。

- 24) この病は『風の谷のナウシカ』『天空の城ラピュタ』『もののけ姫』でも繰り返し語られてきた。「火=魔法=文明」の病である。
- 25) 「世界の約束」(作詞・谷川俊太郎、作曲・木村弓、編曲・久石譲、歌・倍賞千恵子)。「涙の奥にゆらぐほほえみは 時の始めからの世界の約束 いまは一人でも二人の昨日から 今日生まれきらめく 初めて会った日のように 思い出のうちにあなたはいない そよかぜとなつて頬に触れてくる 木漏れ日の午後の別れのあとも決して終わらない世界の約束 いまは一人でも明日は限りない あなたが教えてくれた 夜にひそむやさしさ 思い出のうちにあなたはいない せせらぎの歌にこの空の色に 花の香りにいつまでも生きて」『ロマンアルバム ハウルの動く城』徳間書店 2005年 153頁。
- 26) 『ハウルの動く城』劇場版パンフレット 東宝株式会社 2004年。「今回は映画全体を通して常に流れる印象的なテーマを1曲欲しいと要望したのだ。久石さんの1曲のテーマ作りがはじまった。そうして誕生したのがあるワルツ曲。その曲を聞いた宮崎監督は大喜びし、『人生のメリーゴーランド』と命名した」。
- 27) スタジオジブリ責任編集『THE ART OF Spirited Away』徳間書店 2001年 236頁。

図版出典

- 図1 スタジオジブリ責任編集『THE ART OF HOUL'S MOVING CASTLE』徳間書店 2005年 43頁
- 図2 『ロマンアルバム ハウルの動く城』徳間書店 2005年 45頁
- 図3 宮崎駿『スタジオジブリ絵コンテ全集 14 ハウルの動く城』徳間書店 2004年 537頁 (1198)
- 図4 宮崎駿、同書 531頁 (1185)
- 図5 宮崎駿、同書 333頁 (698)

Folk Roots of Miyazaki's *Howl's Moving Castle*:
The Girl from *Ubakawa*
and the Boy from *Tanishi Musuko*

by Noriko FURUKAWA

The animated film *Howl's Moving Castle* by director Hayao Miyazaki is a fantasy story produced in Western European style, based on a novel by the British writer, Diana Wynne Jones. In Miyazaki's previous work, "Spirited Away," which was set in Japan, he underlined the importance of telling children about Japan's rich folk culture. However, his next work, *Howl's Moving Castle*, at first glance appears to have no connection to Japanese traditions. However, in fact this work has strong ties to the folk tales that have been handed down in Japan. The character Sophie strongly resembles the little girl from the folk tale *Ubakawa*, and the character Howl is very similar to the little boy from the folk tale *Tanishi Musuko*. These main characters never meet each other in the Japanese world of folk tales, but they do in this film, where they influence one another. This article will reveal that this work by Miyazaki, while having a Western appearance, is attempting to create a new "Japanese folk tale" that will resonate deeply with Japanese people.